そして、「パレード」という言葉は消えた

By Chigaya Kinoshita

現在の日本における原発をめぐる社会的動向は、膠着状態にあるようにみえる。「将来における原発の廃止」を支持する世論は７割以上でほぼ定着し、「脱原発」を掲げた管直人政権の後を襲った野田政権も、あからさまな原発推進を言い出せないでいる。支配層としては、当面は原発政策についての明確な方向性をしめさず、すべての原発が点検の為に停止する来年春までに再稼働させるために、世論の鎮静化を図ろうというところなのだろう。世論との明確な対立軸を際だたせないようにすることに、いま政権は専念している。

しかしながら、反原発をめぐる社会運動は質・量ともに着実に前進している。この半年間の戦いは、これまでの日本の社会運動のあり方、運動と社会の関係を大きくかえつつあるといえる。９月１１日に東京・新宿で行われ、一万人が結集した反原発デモは、警察による猛烈な妨害にさらされた。集会参加への妨害、デモ隊列への介入があからさまにおこなわれ、それに抗議する１２名の参加者が逮捕された。警察側がこれほど執拗な弾圧をおこなった理由は明白である。三か月前の６・１１、同じく新宿駅前広場（アルタ前）で開催された大集会では、警察の予想を超え、３万人が結集し、日本社会ではこれまでみられなかった祝祭空間が創出された。だれもがここに「タハリール」をみた。ここにチェニス・エジプト革命からつづく、世界的な社会変革のパターンが見出されたのである。警察側は、こうした新たな運動と空間の創出が、原発問題から社会問題全般に波及し、日本の社会運動のありかたそのものを根本から変えてしまうことを恐れた。したがって、警察は、９・１１の集会開催の直前に、アルタ前から出発するデモコースを強制的に２キロ近くはなれた公園に変更した。それでもデモ隊は夕刻にアルタ前に結集することを宣言し、それに対して警察は、デモ隊列に襲い掛かることでアルタ前集会の参加者を減らし、運動の機運を殺ごうとしたのだ。それでもデモ隊は、夕刻、厳重に警備され、さまざまな妨害物を設置されたアルタ前広場にもどり、空間を占拠し祝祭空間の再現を試みた。

象徴的空間をめぐる国家との争奪戦を、われわれははじめて経験した。

少なくともここ十年以上の日本の社会運動では、この９・１１のような大量逮捕の事態が生じると、政党、労働組合、市民運動の枠組みから批判され、切り離されることが多かった。「過激なことをやったからだろう」「そんな過激な戦術をとると、一般市民が参加できなくなるから困る」というわけである。ところが、今回の場合はそうはならなかったのだ。

９・１１デモのほぼ一週間後、９・１９日に東京で開催された反原発集会には６万人が結集した。社民党、共産党や原水爆禁止運動、知識人が連携し、組織動員も行われてのものであった。そこでみられた情景は、「有名人」が登壇し、のぼり旗が林立し、居酒屋でおっさん たちがインター熱唱するなど、これまでと同じような側面があった。しかしながら、こ の９・１９の集会が提起された三か月前の社会運動の「条件」をおもいかえしてみると、この９・１９のデモの高揚は予想もできなかった。６月時点までの左翼の組織間の対立は３・１１以前と同じく深刻なものだったからだ。ところがその後、

全国で無数のデモが展開された。東京の大きなデモだけではなく、日本列島のすみずみでデモが「あたりまえ」のように行われるようになった。そして街頭ではこれまでとはことなる出会いが生まれ、関係が構築され、そうした経験の蓄積が、左派の協働の必要性を実感させ、そして、それに応じるかたちで組織間の協働もさまざまなレベル ですすんだのである。この六か月間のプロセスが、そこでの経験の蓄積が、この９・ １９の一–実際には６万人以上が参加していたとおもわれる。なお６万人規模集会は、日本では少なくともここ２０年はない––集会の求心力を高めていったのである。９・ １１アルタ前集会とは異なり、９・ １９の集会は一見「昔と同じ」組織動員集会にはみえるけど、その内容は 「下からの力」で充填されたのだ。古い殻の中に、新しいものが生まれている。

もうひとつ大 事なのは「表現」である。２００３年には、日本でもイラク反戦運動がおこなわれた。当時、街頭行動を「デモ」じゃなくて「パレード」と呼ぼうという動きがひろがった。この言葉づかいは、単に表現上の問題にとどまらず、当時の街頭行 動のあり方をも規定していた。日本的な意味合いでこの「パレード」という言葉を使うのは、「これまでの左翼だけじゃなくもっと多くの普通の人に参加してほしい」という意図から出たものだった。それはしかし、僕からいわせれば「民衆」に対してではなく、「主流文化」に迎合するだけのものだった。２００３年イラク反戦集会では、１９９９シアトルの経験に逆行するような、「労働組合はこち ら」「市民はこちら」などという「すみわけ」を常態化させる「工夫」がとられた。また、同じ時期に台頭したサウンドデモのような新しいスタイルの急進主義の戦術をめぐって、反戦運動の主催者とサウンドデモ側は、対立した。「サウンドデモのような「過激」なやりかたは、日本人には受け入れられない」というわけである。実際、サウンドデモから逮捕者がでても、デモ主催者は対応すらまともにしてくれなかった。そして、「とにかく多くの人にうけいれられよう」という 傾向が運動間の分断と萎縮をまねき、イラク反戦デモは最大参加者５万人をピークにあっという間に動員力を失なったのである。日本のイラク反戦運動がポピュラーなものだったのはたった二か月の間だけだった。

しかし今回は違った。こんな感想がある「我々が空き缶叩いたり、ハーモニカ吹いているのをみて、次回は自分たちも 楽器だ、と言っている人もいた。そして、ドラム隊が太鼓をたたいてデモ隊列を迎えいれると、労働組合の人々が手を振って喜んでいた」。

デモにはじめて参加した人はこんな感想をのべている。「今日、参加してみて、もしかすると何とかなるかもしれないという希望を抱きました。それ位、沢山の人が集まり、熱気がありました。私同様に、参加なれしてない人も多くて、戸惑うシーンもありましたが、デモに参加した人も、遠巻きに見ていた人も、関心がなければ、この場にいないのだから集まったことに意義があるなと思いました」。「デモの終着地から駅に向かう途中、デモの「原発止めろ」の音頭に若いカップルが、思わずつられているのを見ました。参加者じゃないようでしたが、楽しそうでした。また、若い男性が「あ～、俺も本気で考えてみようかな～」と彼女に話しながら歩いているのも目撃。デモの効果って、やっぱりあるなと思いました。」

この９・ １９の明治公園の集会 では、この逮捕者のカンパを集めるグループに参加者がみなエールをおくり、励まし、一緒にカンパを集めてくれた。あっというまに６０万

円以上が集まった。「自分とは違うスタイルの活動に触れて励まされた」という感想がある。このような異なる経験や思想、スタイルを持った者同士の「共同性の発見」の経験は、日本では久しくな かったことである。われわれはいま、１９９９のシアトルにいるのだろうか？それともタハリールに迫ろうとしているのだろうか？

そして、「パレード」という言葉は消えた。活動家が勝手に民衆を保守的なものとみなし、デモンストレーションが生み出す解放感と祝祭性を忌避し、集団が作り上げる想像力を枯渇させ運動を萎縮させていくという、ここ数十年の日本の社会運動の悪しきパターンはついに一歩乗り越えられたのである。日本の２００３年イラク反戦運動は、戦争という事態に条件反射的に反応し、一定の動員を獲得したが、しかしそれまでの運動の主流文化を覆すにはいたらなかった。しかしながらこの３・１１以降の日本の反原発運動は、半年間の経験に裏付けられながら、徐々にそれまでの運動文化の「常識」をほりくずし、新たな運動文化をはぐくもうとしている。事態の深刻さにもかかわらず変化の歩みはゆっくりではある、しかしそれは着実であり、運動の高揚は今の支配層が思いたいような「気まぐれ」なものではなく、かれらが望むようには決して消え去りはしないのだ。